月下に咲く華

南都葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月下に咲く華

【Ｎコード】
Ｎ００８７Ａ

【作者名】
南都葵

【あらすじ】
ある日、阿笠邸に客人が訪れる。その人はコナンが工藤新一であることも、哀の正体も何もかも知っている人物だった。その人物から、哀はプレゼントを受け取り…？

Prologue

月が輝く空の下
ふわりとそこに在ったから

形を変える月の下
それは
とても
美しく

降り注ぐ月光の下

きらきらと
輝いて
幻夢を誘うから

消え失せぬよう
忘れてしまわぬよう

この生命の一瞬を切り取って
透明な液体で満たされたこの瓶で
その生命を永遠に変えよう

一瞬では勿体なさ過ぎる
あまりにも
美しく
あまりにも
凛としていて
あまりにも

儚いから

一瞬を

久遠へと転じよう。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

後書き
初めまして。
なつきと申します。
このプロローグは
誰かが吟じております。
さて、誰が吟じているのでしょうか。
答えはラストで。
では、次回本編でお会い致しましょう。

1．来訪者ーA　visitorー

まる5日のゴールデン・ウィークを終えた、金曜日。
江戸川　コナン、小嶋　元太、円谷　光彦、灰原　哀、吉田　歩美の5人は、学校帰りに哀が居候している阿笠博士の家に博士が、開発したゲームをしに寄っていた。
「今回のは、中々イケてるぜ。博士」
「ええ。結構楽しめましたよ」
元太の言葉に、光彦も同意する。
「うん、楽しかった」
歩美も同意したので、博士は上機嫌で言った。
「そうかそうか。今回はアドバイスをくれた人がおってな。その人のおかげなんじゃ」
「アドバイス？」
「そうじゃ。その人は、今日、来ると言っとったぞ」
コナンが訊くと、博士が鷹揚に頷いた。
タイミング良く、チャイムが鳴り出ていく博士を5人は見送る。
「こんにちわ、博士。久しぶり。どうだった？　ゲームの批評は」
朗らかにゆっくりと話す、低い声。
その声を聞きつけて、光彦が言い出した。
「いま来たお客さんは、男性でしょうか、女性でしょうか」
「私、男の人だと思う」
「オレもオレも」
「ねぇ、コナン君と哀ちゃんはどう思う？」
歩美の意見に元太も頷き、歩美はさらにコナンと哀に話をふった。
「俺は女性だと思う。男性にしては声が高い気がする…」
「私も。どことなく、言葉に女性的な響きがあるわ」
コナンは、少し考えてから答えて、哀もいつものようにクールに返した。

「米花町に来るの久しぶりだったおかげで、道に迷っちゃって、この子達に送ってもらってさ。知り合いなんだって？」
博士と話しているのが、彼の言ってたアドバイザーだろう。
その後ろに見慣れた人物が居た。
「蘭おねーさん。園子おねーさん」
歩美が、嬉しそうに声を上げた。
コナンの居候先である毛利探偵事務所で、探偵をやっている小五郎の娘、毛利　蘭とその親友で鈴木財閥のお嬢様、鈴木　園子だった。
「どうしてお２人が？」
光彦の問いに園子が答える。
「蘭と一緒に歩いてたらさ、何かどっかで見たことある顔だなって思ったのよ。よく見たらパーティ会場で壁の花になってる人でさぁ」
「七原　月菜です。よろしく」
背の低い子供達に視線を合わせるように屈み込み、月菜が微笑む。
月菜は、白いシャツに黒いズボンという出で立ちで、美しいと呼べる漆黒の長い髪を持つ女性だった。
「私は、吉田　歩美。小嶋　元太君と円谷　光彦君、江戸川　コナン君に灰原　哀ちゃん」
歩美の紹介に会釈を送る子供達に月菜は、改めてよろしく、と言った。
「そういえば、パーティー会場って？」
失礼とは知りつつも、コナンが訊いた。
園子もとてもお嬢様には、見えないが月菜もまたお嬢様に見えない。
「元華族って言葉は解る？」
「うん、爵位を持つ人とその家族の事だよね」
「旧憲法下、皇族の下、士族の上に置かれ貴族として遇せられた特権的身分のことで、
１８６９　年旧公卿・大名の称としたのに始まり（旧華族）、８４年の華族令により、
公・侯・伯・子・男の爵位が授けられ、国家に貢献した政治家・軍

人・官吏などにも適用されるに至ったけれど、１９４７年、新憲法施行により廃止された…」
コナンが答え、哀が淡々と難しい説明を喋った。
「２人とも、よく知ってるな。七原の家はその元華族で、資産家なんだ。それで、著名人や資産家、財閥関係のパーティーにお呼ばれするわけ。尤も私は、現・当主であるご夫妻に是非にと望まれ、養子に入ったから七原の血は流れていないんだけど」
「養子？　おねーさんのお父さんとお母さんは？」
月菜が苦笑して、言葉を切ると歩美が問うた。
「ずいぶん前に亡くなってしまったんだ」
その答えに、歩美、元太、光彦は悲しい顔をする。
「でもね、みんなと同じように友達が居たから、全然寂しくなかった」
励ますように言って、彼女はまた微笑む。
「そうそう、手土産にアップルパイ作ってきたんだ。みんなも食べる？」
『わぁい』
喜ぶ３人を尻目にコナンは、疲れたようにため息を吐き、哀はそんな彼にクスッと笑みをこぼした。

蘭が、切り分けて紅茶を配ると言いだしたので、博士も蘭に任せてソファに腰掛けた。
「君の言うとおり、この子達を裏切るような展開を考えたら大成功じゃったよ」
博士は嬉しそうに報告する。
「プレイヤーに予想される展開は、ありふれているから、プログラマーに要求されるのは、その予想を裏切る事。８年前、爆発的ヒットした携帯型育成ゲームがあったろう。今年また発売したらしいけどね」

「知ってる。あたしもやったもん。小学生の頃」
「育ててみるまで、何になるか解らないし、ちゃんとしてないと死んじゃったりするゲームだったんだけど、多くの子達は、『死んじゃった』って悲しんでる。それこそ、本当の動物みたいに心を込めてる。ゲームで要求されるのって何が起こるか解らない、どうなっちゃうのかも解らないっていう不可視さ加減だと思って」
「それで、わしにアドバイスをくれたんじゃ」

話が、一区切り付いた時、蘭が姿を見せた。
「お待たせ。みんな」
蘭が運んできた月菜お手製のアップルパイは、市販されている物よりも大きめで、1切れでも食べ応えがありそうだった。
「大きめだけど、甘さもカロリーも控えめの女の子の味方だからね」
『いっただきまーす』
全員が唱和して、アップルパイを食べ始める。
「そういえば、蘭ちゃんのお母様にはいつも骨を折って頂いていて…今度会う機会があったら、宜しく伝えて？」
「えっ？　母をご存じなんですか？」
「ええ、以前からね。私は、妃さんにちょっと厄介な依頼人を紹介する事が多くて。勿論、妃さんは優秀な方だから、皆さん有り難がっていたけれど」
蘭の母である妃　英理は、無敗を誇る弁護士で、小五郎とは別居中だ。
「はい。伝えておきます」
にこやかに蘭が答えると彼女はありがとうと呟いた。
ふと、電話が鳴った。
博士が出る。
「おおっ、優作君か。久しぶりじゃのー。何、有希子さんと日本に来てるじゃと？
それで、今はどこに居るんじゃ？　タクシー？　もうこっちに向か

っとるのか？　ああ、解った。伝えておく」
会話の片側しか聞こえないが、事情は読めた。
「おーい、みんな」
「全部、聞こえてたわよ。博士」
勇んで、博士が伝えようとすると哀がクールに答えた。
電話の相手は、著名な小説家工藤　優作とその妻の有希子だった。
有希子の旧姓は、藤峰といって２０歳の若さで引退してしまった元女優である。
「蘭姉ちゃん。僕、有希子おばさん達とお話ししたいから今日は、こっちに泊まってっても良い？」
コナンは、博士と有希子の親戚の子という事になっている。
「そうね、明日は土曜日だから学校も休みだし。良いわよ」
蘭としても博士や工藤夫妻の元なら、心配はない。
尤も、コナンとしては実の母親である有希子の猫可愛がりぶりを思うとげんなりとしないでもなかったが。

工藤夫妻と入れ違いになるかたちで、蘭達や元太達は帰っていった。
「おや、久しぶりだね。ミレン君…否、今は月菜君だったね」
工藤夫妻に会う為、残っていた月菜が優作の言葉に立ち上がって微笑む。
「別に、ミレンと呼んでも差し支えはないし、気を遣う事も無いよ。でも、本当に久しぶり、優作、有希子」
「本当よ。仕事にかまけすぎじゃないの？」
「おかげさまで、仕事と恋愛してるんだ」
有希子の言葉に、月菜は肩を竦めて軽口をたたいた。
「灰原　哀君だったね。これの父親の工藤　優作と妻の有希子だ。尤も、有希子は既に君と会っているそうだが」
「ええ、事件に巻き込まれてしまったけれど」
あくまで、クールな態度を崩さずに哀は答えた。

「父さんっ」
博士や哀は、彼の事情を知っているが、（哀に至っては薬を作った張本人である。）月菜は違う。
内心焦るコナンを尻目に、有希子がのんびりと言った。
「あら、ミレンちゃん。まだ言ってなかったの？」
「あのね、彼とは殆ど初対面で私が来た時、此処には彼の友人が居たの。
命を狙われるかもしれないリスクを彼が友人達に負わせる事はないだろうし、貴方達夫婦が来てからの方が、説明するにしてもスムーズに行くと思ったから黙っていたの」
有希子を睨むようにして、月菜は荒々しく話した。
「なるほど、猫をかぶっていた訳だな」
「優ー作っ。失礼な、最低限の社交性と行って欲しいな」
優作の言葉に軽い脱力感を覚えたのか、苦笑して月菜は言葉を紡いだ。
「まぁまぁ、3人とも。ほれ、新一君達にも説明せんといかんのじゃ。珈琲でも飲んで、落ち着いたらどうじゃ」
博士の言葉に3人は、ソファに腰掛けながら苦笑していた。
コナンは驚きの表情で固まっているし、哀にしても驚きの表情を隠せないでいた。

1．来訪者ーA　visitorー（後書き）

後書き

改めてまして
初めまして。
コナンの小説も初めての南都葵ーなつきと申します。
投稿も初めてなので初づくしです。
話の本題というか、キーグッツ？　が出てくるまで時間がかかってます。
書き始めた当初は、前後編の短編のつもりだったのに……。
あれ？
１章が３，０００字を越した所で諦めました。
基本的に哀ちゃん中心の話なはずですが、オリジナル月菜ーつきなちゃんが、出しゃばってますね。
のっけから、難しそうですが、次の２章は暗めです。
そしてまだ月菜が出しゃばってます。
目指せ、７章以内完結って事で頑張ります。
ではまた次回。

2．真実と情報と異なる者－Truth&Information&Strana

Paragraph：1　昔話

2．真実と情報と異なる者－Truth&Information&Strana

博士が淹れた珈琲を飲みながら、優作がゆっくりと話し始める。
「まず、私や有希子や博士と彼女の関係から話そうか？
尤も、その前にミレン君の身の上話が必要だが…」
そこまで言って、優作は月菜に視線を向ける事で、話を引き取らせた。
「長くて、詰まらない上に救いはないが…」
視線だけで、月菜はコナンと哀に問うた。
2人が軽く頷いたのを見て、月菜は話し出す。
「私は、戦争孤児でね。私の生まれた国はエルトリア王国と言う。
現在は、カリトリア共和国となっている国だ。
エルトリアには、王位の世襲制が無くて歴代の国王達に血縁者は殆ど居ないんだ。世襲制を取っていないせいで、クーデターが頻繁に起こっていた。
私が生まれた時エルトリア史上にも希と言われた、3代同族王の3代目が国を治めていた。
私の出生した家は、ケーシー家と言って、当時の王の右腕と呼ばれた側近の父、エザーネルと社交界の花と呼ばれた母リュディリアーノの3人目の女児として生まれた。
そして、ミレンと名付けられた。
しかし、5歳になる頃その地位を奪わんとクーデターが起きた。
成功すれば、現王の側近は全て排除されるのが通例だから、当然『甘い汁』を目当てに性根が腐った連中が多かった。
クーデターを起こし、王となろうとした奴もそんな連中の一人だった。
私の目の前で、私や、他に5人居た兄妹を守ろうとして、両親は殺害された」
月菜の口調は、淡々としていた。

その月菜の言葉に、哀は少し辛そうに顔を歪めた。
［お姉ちゃん…］
まるで、歴史書を読むように月菜は身の上話を続けた。
「その時既に内紛は最悪の事態まで、進展していたんだ。皆、自分が生き残るだけで精一杯だったし、精神を病んでしまう者も少なくはなかったらしい。
内紛は、3年ほど続いた。
生き残った民草の中でも、最もあくどく、利己的で道徳心の無い一家が政権を握ってしまった。
そして、彼らは私という最高の傀儡を見つけた」
「傀儡？」
哀が、静かに問いかける。
「ああ、隠れ蓑というべきかな、彼らはこう言ったんだ。
『前政権の側近、ケーシー家の3女ミレンを保護する事に決めた。我々は、彼女のような孤児を作らない為にも、和平に全力を尽くす。』と。
しかし、実際は大いに違ったよ。
重税を強いて、民草は貧困を極めた。作物が、不作な時も、だ。
医療設備を王族が占領して、市井には難病や重病が何度も流行った。
医療行為を無許可に行えば、重罪に科せられた。
当然、治安は極悪状態で、民草は皆疲れ切っていた。
王城に住まう事になった私もサンドリヨンの気分だったよ」
「サンドリヨン？」
有希子が小首を傾げる。
「サンドリヨン一　灰かぶり姫。シンデレラのもとの話さ」
「でも、ミレンちゃん王族のお城に居たんでしょう？」
優作の言葉にサンドリヨンという単語の納得がいった有希子が、問いを重ねる。
「それが、傀儡政治の最たるところだったんだよ。
確かに私は、王城に住まい、身なりを整えるに足り得る金銭を与え

られ、温かい食事も充実した医療も受けられた。
その気になれば、ね。
側近達は、趣味を同じくする者で集められたとしても、奉公に上がる者は違うよ。
料理人、お女中衆、腕の立つ傭兵、城に従事しに行く人間は、確実に王族や側近を上回る。
食事の時に、その月の支度金ーまあ、お小遣いみたいなもんを国王が渡すんだ。
食事を終えて、私室に下がると国王の実子である姉妹が私の部屋を訪れて、こう言う。
『貴女は、私たちと違って身なりを整える必要も、教養を蓄える必要も無いのだから、その多額の支度金は無用でしょう？　私達が有効に使用して差し上げます。』
その支度金は、現在の日本の通貨単位で言えば、大体６，０００～７，０００円くらいの額になるんだけどね。
私の手元に残るのは、６００～７００なんだ。尤も、それでも大金だったけどね。
その当時は、１ヶ月の世帯収入が８０円くらいあれば、裕福と言えたから。
ところが、彼らにとって最大たる誤算がやってくる。
現在は、エルトリアを吸収してるかたちになる、カリオン王国ってのが、お隣同士だったんだわ。
私は、内紛に国内が揺れていた頃、隣国との国境近くに居た事もあってね。
その時、カリオン王国の弟３王子を助けていたんだ」
「なるほど？　貴女の国が落ち着いたのを知ってその王子が来たのね」
哀の呟きに、月菜が頷く。
「それも、国王夫妻と弟王子を伴ってね。国境を隣する国同士だから近さもあって、親書が届いて、数時間後にいきなり王城に訪れて、

国王同士が話すわけ。
『貴殿が、養女に迎えられたミレン嬢に私の息子が救われた』ってね。
でも、あくまで仮の養父でしかないエルトリアの国王は焦って私の身支度をさせて、会談の場所に呼び寄せた」
「しかし、ろくな支度を許されなかったあんたは、当然他の人間より劣る支度で現れるしかなかった…」
「そ。国民は、騙せても隣国の最高権力者は騙せなかった。数度に渡る親睦と銘打った来訪で政権の金メッキは剥がされ、傀儡の事実が露見した。
でも、その時気骨ある人間や良い意味で野心ある人間はみーんな重刑で処罰されていて、このまま愚かな国王をのさばらすわけには行くまいと、言う人間は誰1人と居なかった。そんな頃、カリオン王にある進言がもたらされた。
『このままでは、いずれエルトリアは衰退し、消え失せる。同じ消失の運命にあるならばどうか貴殿が支配し、1つの国家として消失させたい…』」
「その進言をしたのは、貴女自身。でも、どうして？　元国王の側近の娘だった貴女には身を切るような選択だったハズでしょう？」
哀は、月菜が珈琲を飲み干すのを待って問いかける。
「貴女の言うとおり、父母が愛したエルトリアが無くなるのは、辛くて悲しい事だけれど。でもそれ以上に、国民をいたずらに苦しめてのさばっている奴らが許せなかった。
カリオン王や次期王に統治される事を願って、軍事機密を漏らして、カリオン王国に攻撃させた。ただ1つ、『国民には傷を付けず、誰もあやめる事はしない』という約束をして。エリトリアは陥落、カリオン王国に吸収され、カリトリア共和国として新たな歴史を刻む事になった。が」
「理由はどうあれ、国を売った事には変わりないミレン君は再建がなされた後、2度と故国の大地を踏むまいとして、各国を渡り歩く。

イタリア、ドイツ、フランス、アメリカだったかな？」
月菜の言葉を引き継ぐように、優作が再び話し始める。
優作の疑問符に頷きの答えを月菜は返す。
「少し横道にそれるが、新一、哀君。２人は、フィギアスケートを知っているかな？」
「ああ」
「ええ」
２人がそれぞれ答えたので、優作も話を続ける。
「彼女は、ジュニア時代氷上のフェアリークィーンと呼ばれたほど、技術のあるフィギアスケーターだったんだよ」
優作の言葉に苦笑して、月菜は説明を始めた。
「フィギアスケートというのは、厚く固い氷上で、クラッシクバレエをやるようなもので、ジャンプにも多くの種類があってその１つ１つに技術が要る。
フィギアスケーターにも等級があって、こっちだと８級以上から選手権への出場が可能になる。確かに私はジュニアスケート史上に名を残す事が出来たし、スケートファンにも知られているが、もう選手としてはリンクに立つ気がない。
華やかな世界に居ながらも私は、裏の世界や闇の世界と呼ばれるものに近しかったんだ。
警察と協力して、マフィア組織を潰したり、極悪犯を逮捕したりしてたからね。因みに今も刑事だよ。残念ながら、本庁には居ないけどね」
「私達とミレンちゃんが出会ったのは、ドイツでだったわ。新ちゃんは、まだ小さかったから覚えてないでしょうけど」
ミュンヘンを観光していた工藤夫妻とは、半ばギャグコミックじみた出会い方をした。
肩を竦めた月菜の手を取って、有希子が話す。
「懐かしいな。あの頃は私も生意気な子供だったね。
小麦粉袋を抱えた私と有希子がぶつかって。お互い真っ白になった。

それから、優作達を通して阿笠博士とも出会って。
私が、七原ご夫妻と最初に出会ったのは、パリでね、子供ながらに店の手伝いをしていた私を見初めてくれたが、養子のは話を1度は断ったんだ。
ところが、ニューヨークで再会して、『運命の再会だ』って言われた時には、さんざん迷ったけど、アメリカで中学を卒業する事を条件に承諾して。
単身１５歳でこちらに帰化する為に日本に来て、七原の養子に入ってミレンっていう元の名前が、こっちで『月の名』って意味だって言ったら、月菜と名付けて下さったんだ。
まぁ、こんな所かな？」
小さく笑いながら月菜は、身上話を終えた。
「月菜君は、いつだってどこだって警察関係者に協力しとるんじゃよ。アメリカではＦＢＩに居たこともあったんじゃろ？」
「ああ、コナン君、君のお父さんである優作の犯罪関係の情報ファイルに収められている情報は、私がリアルタイムで話していたことも含まれているんだ」
博士が、珈琲を注ぎ足しながら問いかけると、苦笑して月菜は頷いた。
「怪盗ＫＩＤの事とかよね」
有希子が言葉を紡ぐ。
頷いて、初めて月菜はコナンに問いかける。
「怪盗１４１２号－通称怪盗ＫＩＤ。通り名を数多く持つこの怪盗と、コナン君。
君は幾度か対峙しているね？
鈴木財閥の家宝・ブラックスターの予告の時。
ロマノフ王朝の財宝・インペリアル・イースター・エッグ、メモリーズの予告の時。
鈴木財閥相談役・鈴木次郎吉所有のビッジュエル・ブルーワンダーの予告の時。

そしてスターサファイアの指輪「運命の宝石」の予告の時」
ま、その前にも1度あるみたいだけどね。と月菜は小さく付け足した。
「彼に限らず、警察組織が公表できるものや、警察が知らない情報も些細なものを含めて数多く、多岐に渡り優作に情報を提供しているよ」
「新一、私や有希子、阿笠博士も彼女に嘘を吐くことが出来ないんだ。どうしても、だ。
それは、私達が彼女と約束を交わしたからじゃない。
彼女には、何1つ、偽ることは出来ないんだ」
月菜の言葉が終わるのを待って、優作が殊更落ち着いた口調で話したものをコナンも哀もすぐには理解できなかった。

後書き

どうも、なつきです。
2章が、思いの外長くなってしまったので、パラグラフで区切ってしまいました。
月菜の台詞は長く、暗いものが多いのは何故？
もっと闊達で姉御肌な外人江戸っ子娘のハズなのに。
あり？
とはいえ、パラグラフ2でようやくタイトルと連結できるので、ほっと一安心です。
尚、作中には、架空の国名もあります。ご了承下さい。
また、傀儡はかいらいと読みます。ご参考まで。
ではまた次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0087a/

月下に咲く華

2010年10月9日20時50分発行